

フィクションよりもフィクションらしい事実のために

——尹健次先生という存在の励まし

小馬 徹

私は神奈川大学教員としての尹健次先生しか知らないのだが、それでも猶その存在感は圧倒的で、忘れようにも忘れ難い思いが胸の奥深くに宿っている。

*

曲形なりにも研究者である私は、本物の学問と出会うという鮮烈な経験が、心底人を驚かせ、世界の見え方を丸ごと変えてしまう程の巨大な衝撃力をもっていることを知っている。それは、身震いするばかりの感動をもたらすと同時に、疑わずに安んじて依拠してきた従前の知の基盤を撃ち、根底から揺さぶって強い不安に陥れずにはおかないものでもある。

真つ向から人生と対峙して命懸けで思考し、渾身の力で国家や社会と切り結んで生きている一人の生身の人物の存在を日々肌身に近く強く感じていること。それが本物の学問との出会いにも直に通じる程の比類のない経験

であることを、身を以て尹先生が教えて下さった。

*

しかしながら、尹先生との接点が特に大きかった訳ではない。外国語学部基本科目部会の同僚であったのは十五年間。その後、同部会は「生木を裂く」ように二分されて、教員たちは新設の外国語学部国際文化交流学科と人間科学部人間科学科に分属させられた。そして尹先生は前者、私は後者に属して（本年三月末まで）九カ年の歳月を送ることになった。

とはいえ、17号館四階にあるそれぞれの研究室に元のまま居続けたのだから、その後も以前とほぼ変わらぬ頻度で廊下やトイレで偶々出会い、一言二言、言葉を交わした。共にメンバーだった或る共同研究会の催し事を除けば、日頃はそのくらいの到って淡白な付き合いだった。

日々の出会いの折、長身を折り畳むように肩を窄めて目を伏せ、物思いに耽りながらゆっくりと歩かれる姿に接することもあれば、目を細め、赤子のごとく愛くるしい、見惚れる程柔らかな笑みを零されている姿に思わず頬が緩むこともあった。先生の身体と顔のその表情が自ずと響き合って内面を劇的に描出しており、その時々の変化の大きな幅が先生の存在感をより鮮やかで印象深いものにしていった。

*

或る日、研究室に招じ入れて、朝鮮半島のお気に入りの美術品のスライド群を見せて下さったことがある。学生時代から絵画鑑賞を密かに何よりの楽しみとしてきた私だが、どの作品にも一目で魅了され、尹先生の高雅な趣味世界の豊穡さに一驚した。また先生は若い頃から詩作され、多数の学術書・思想書の他に『尹健次詩集 冬の森』（二〇〇九年、影書房）を著されている——光栄にも、その出版祝賀会にお招き頂いた。鋭敏な審美的なセンスが妥協のない言葉を鍛え育んで自ずから思考の揺籃と成り、思考の練成が審美眼をさらに磨き上げてきたのであろうか。

教授会の発言でも、舌鋒の鋭さは際立っていた。発言される機会は多くなかったが、一旦口を開けば論理は大局を挟って過たず、視界の霧を晴らすように凡愚の蒙を啓いて下さった。ことに大学行事のあり方が朝鮮半島的情勢に何らかの意味で政治的に関わりを持ち得る場合、北を「普通の国」として扱って衡平を失すべきではないことを、理を分けて明晰に論じられた。そのよく通って艶やかな音声と生彩に満ちた口調が、今でも鮮やかに心に蘇って来る。

全学の目をさらに強く睜らせたのが、学生部長時代の断固たる処断である。大学紛争時代に或るセクトの拠点校だった神奈川大学では、その後も彼ら「学生」が居残って名乗る「学生自治会」が校舎の一角を「自治会室」として専有し続け、隠然たる力を維持していた。尹先生は、アンタツチャブルとされたその案件にタブーを犯し

て断固介入し、彼らを実力排除されたのである。文字通り、自ら全責任を負って決行された命懸けの行動だっただろう。

くわえて、私を当惑させたのは、学部と大学院で教育学を専攻され、教育学の教員として外国語学部に採用された（と思う）尹先生が、初対面の折に、教育学を一貫して痛烈に批判されたことだった。そして自ら教育学をそのままの形で講じることを潔しとされず、授業を「人間形成概論」として講じられていたことである。その実施のためには教育学に携わる者としての透徹した自己批判が欠かせず、並大抵の覚悟でできることではない。

（なお、尹先生とその判断の背景は、『状況』二〇〇八年一二月号の特集「尹健次『思想体験の交錯』を読む」中の先生のインタビュー記事、「私の『思想体験』」に詳しい）。

このように、感性、感情、審美眼、言語と論理、学問研究、信条と倫理、実践的行動等々、仮にそのいずれか一つを取っても、尹先生の間人としての器量とその振幅は私の側の容量と形状を遥に超えて複雑なものだ。それゆえ、私は何時も即座に圧倒され、驚き、撃たれ、不安になり、時には深刻な自己批判の淵に立たされることもなった。

要するに、尹先生の傍らに日々あるとは、絶えず尹先生によっていわば間接的に「告発」され、自らの価値観と立ち位置を根底から不断に再考させられることもある。とかく自分に甘い私は大学教員・研究者としての日常的な自己批判を十分に徹底できなかったけれども、身近な同僚として尹先生が存在を強く意識させられることがもし無かったならば、それについての一筋縄では行かない多難な取り組みの片鱗さえも示せなかったに違いない。

*

ちなみに、（唐突のようだが）民俗学者の六車由実さんのことがここで心に思い浮かんでくる。彼女は、八年間教鞭を執った大学を書類書き等に倦み疲れて辞め、暫く後に郷里の介護施設の職員に転身した。やがて、（論文や報告書の作成を目的とする学術調査とは異なる）介護現場での「テーマなき聞き書き」を通じて認知症患者の人生そのものに直に触れて、その新鮮さと豊かさに目覚めた。驚きと感嘆をもって接してくる彼女と触れ合っていて、疎外され絶望していた患者は自尊心を回復し、目を輝かせ、生気を取り戻す。その聞き書きを通じて、（第一次産業をほぼ排他的な対象としたがゆえに）民俗学が度外視して来た部類の近代的な職業部門の伝承世界を再建させる共同作業が実現し、着々と厚みをまして行った。「忘れられた日本人」に深く目を及ぼした宮本常一にさえ「忘れられた日本人」のもう一つの位層を見出したと言えよう。

こうして彼女は、従来の民俗学と介護サービスの利点をそのまま活かしつつ欠陥を補い合って、両分野の実践を相互的に大きく進歩させ得る「介護民俗学」を自己樹立する（六車由実著『驚きの介護民俗学』医学書院、二〇一二年）。今ここで重要なのは、それが自己批判を徹底させ、敢えて大学を辞しさえした彼女の一切の妥協を排した勇気の（予期せぬ）結果だったことである。

*

さて、尹先生とは22時前後に17号館の廊下で出会うことが時々あった。その場合、決まって尹先生の方から、「まだ残ってんの。嫁さんに逃げられるよ」と笑いながら声を掛けて頂いた。「よく勉強するね」という反語的な枕詞が付くこともままあった。

実は、前任校（国立大学）で大学院設置の話が持ち上がり、その要員になるのが嫌で（一般教養科目だけを教えればよい条件を求めて）神奈川大学に移ったのだが、担当授業数やその他の業務の量は倍増した。しかも、歴史民俗資料学研究科が学部をもたない「独立大学院」として間もなく創設され、私も参加させられてしまった。さらに、間もなく所属学会の理事（庶務担当）や幾つかの学会賞と科研費の審査業務も付け加わる。何よりも困ったのは、外国語学部と歴史民俗資料学研究科の間に全く連絡性も意思疎通もなく、繁忙期がしばしば重なり合ってしまうことだった。こうして、ほとんど毎晩22時前後まで居残ることになったのだが、要領の悪い私には他にこれといった打開策を思いつけなかった。

赴任後何年目かのこと、尹先生は、「冗談だと思ってるのかも知れないけれどね、本当に嫁さんに逃げられるよ。必ず後悔するよ」と、少し気色ばむように仰ったことがあった。

それも事実ではあるが、あの常套句の含意の核心は、やはりこうだったのだと思う。君の今やっていることは、一体それだけの意味が実際あるのかな。とことん自己批判を尽くして、よくよく見極めてみることだね。本

当に家庭を犠牲にすべき程のことなんだろうか、と。つまり、私の学問研究と人生に対する根本的な疑義と批判を含む、忌憚のない先鋭な問い掛けだったと思う。

尹先生に幾度もそんな真率な言葉を繰り返し届けて頂きながら、私は六車さんのように自己批判を貫徹させられなかった。それでも、その言葉は痛烈で、深く身に沁みた。最後までその言葉をかけ続けて下さった尹先生の類ない真情に、素直に深謝しなければならない。

*

（私が当初冗談として受け取っていたように）尹先生の件の言葉に何処か嘘っぽく聞こえる一面があるとすれば、それはまさしく本物の言葉だからだと思う。マーク・トゥエインが、「フィクションとはありそうなものでなくてはならないが、本物はそうではない」と述べている通りである。

繰り返そう。もし（私が先に挙げた）尹先生に因む幾つものエピソードが容易にありそうに思えないとすれば、それは掛け値なしに本物だからなのだ。そこにこそ、決して譲ることなく真つ向から人生と対峙し、命懸けで思考し、渾身の力で国家、社会、世間と切り結んで行動する生身の人である尹先生の、生きた言葉の真骨頂が存するといふべきである。

尹先生のそうした姿と言葉に長年身を曝してきたせいだろうか、最近の学問のあり方について、不埒にも、辛辣な思いがザワザワと心を過ることがままある。我が敬愛するパブロ・ピカソもまた決して妥協しないで真つ向

から人生を送った芸術家だが、次のように述べている。「コンピューターなんか、てんで役立たずさ。答を引き出してくれる。それっ切りのこった」。

だが、そんな不穏な言葉が不意に私の口について出たとしても、きっと大方の失笑を買うだけだろうなあ。尹先生のように、また六車さんのように、あるいはピカソのように私が渾身の力を揮って人生航路を歩んできたとは、多分誰も認めてくれそうもないんだからね。

やはり、尹先生ご自身の言葉に耳を傾けなければなるまい。「今の若い人たちは、誰もが、学問、学問と言いがちです。頭から大学に行って、大学院に入って学者になるんだと言います。そんなことが何になるのか。（中略）悩み、のたうち、苦しむ過程がなさすぎるのでは、とも思えるのです」（私の「思想体験」、66頁）。

*

その同じインタビューで、尹先生はこうも述べられている。「文系の場合、公募という形で在日朝鮮人が大学教員として採用されたのは、私が最初か、あるいはかなり初期のことであつたのではないかと思います」（同上、64頁）。

本学の学生生活実態調査を初め数多くの機会に、学生たちは、全国各地から集い、独自の成長の背景をもち、様々な学科で学び、サークルで活動している多彩な仲間たちと出会って幅広く交流できる神奈川大学に学ぶ幸運を、感謝の思いと共に口々に語っている。

同じことがどうして教員同士間でも言えないだろうか。神奈川大学が、恐らく全国の大学に先駆け、「公募という形で在日朝鮮人が大学教員として採用された」類稀な大学であるとは、研究教育の府としてどこまでも自由闊達であるべき大学の学問・教育の理想によく叶う、しかし現実には希有の事実である。それは、間違いなく、何時までも誇りとするに足る尊い財産であろう。

いや、そんな形式的なことは二の次でいい。私たち神奈川大学外国語学部・人間科学部の教員たちが、日々その尹先生の傍らにあり、絶えず尹先生によって間接的に「告発」され、自らの価値観と立ち位置を根底から不断に再考させられるという、しんどいけれども、全うで建設的な経験を一貫して持てたことは、公私共に誠に幸いだった。

神奈川大学の先見の明のある英断に、そしてそれ以上に、大きな志を胸に果敢に応募し、他の三十五人を凌いで狭き門をこじ開けて下さった尹先生（同上、64頁）の軌跡に、これからも長く、そして深く想いを致して行かなければならない。